

技術・実践

自宅退院にむけた発育支援目的で 転院してきた児をもつ母親の心理

盛岡赤十字病院 産科病棟

林 理代子・三井 久美・工藤 沙耶・久保田鳩子

はじめに

近年、早産率の増加や救命率の上昇などによって低出生体重児の出生が増加している。特に極低出生体重児、超低出生体重児で出生した児は長期間の入院を余儀なくされる。

地域母子医療センターA病院新生児治療室（以下、NCUとする）は、在胎34週からの新生児を受け入れる医療体制が整備されている。NCUでは、B病院NICUから急性期を脱して病状が安定している児の成長発達の経過観察および母親の育児手技獲得のため、児の転院を受け入れている。そのような児をもつ母親と関わる時に、転院までの児の経過は紹介状や看護サマリーで情報収集しているが、児の入院中母親に転院についての気持ちを聞く機会を設けていない。NCUでは退院に向けて早期から積極的に直接授乳などの育児練習を取り入れているが、その際に「NCUは育児練習に対してスパルタですね」という意見が聞かれたこともあり、スタッフが母親の気持ちを十分に把握することができていないと感じることがある。転院によりそれまで長期間いた環境が大きく変化することは、母親にとってストレスを伴うことが予想されるが、転院時に母親がどのような思いを抱いているかを明らかにした先行研究は少ないことからB病院NICUから転院してくる児をもつ母親の思いを明らかにする意義は大きい。転院時から退院時までに母親がどのような思いを抱いているかを明らかにすることで、母親の心理面に配慮した看護ケアの一助としたい。

I. 研究目的

他院から発育支援目的で転院してきた児をもつ母親の心理を明らかにする

II. 研究方法

1. 研究期間：7～10月

2. 対象者：他院から発育支援目的で転院してきた児をもつ母親

3. データ収集方法の手順

説明書と同意書を用いて本研究の趣旨について同意の得られた協力者に対しインタビューガイドに基づき、15～30分程度の半構成的面接を実施し、児の転院時から退院時までの母親の心理を調査した。語られた内容については承諾を得てボイスレコーダーで録音した。また、年齢、妊娠歴等の基礎情報は、同意を得た上でカルテから情報収集した。

【面接時期】

- 1) 転院から1週間以内
- 2) 直接授乳開始時
- 3) 退院の目途がついた時期

4. データの分析方法

- 1) 面接時、聞き取りした内容から逐語録を作成した
- 2) 語られた内容を文脈ごとに抽出し、KJ法を用いた類似した意味内容ごとに分類しラベルをつけた
- 3) データの妥当性を維持するため、研究者間で

解釈が一致するまで分析を繰り返した

5. 倫理的配慮

本研究は病院倫理審査委員会の承認を得た。対象者に本研究の目的、方法、自由意思に基づき研究の協力の拒否権があること、協力を取りやめても不利益を被ることがないこと、プライバシーの保護、結果の公表について説明同意書を用いて説明し、署名による同意を得た。

Ⅲ. 事例紹介と経過

対象：A氏 30代1経産婦

児の病名：極低出生体重児・早産児・尿道下裂

児の経過：在胎33週0日、胎児機能不全の診断あり、B病院で帝王切開にて出生。出生体重1300g台、AP6/9。児の成長発達の経過観察および母親の育児手技獲得のため、生後39日目に当院へ転院となる。生後44日目より経口哺乳開始となり、生後45日目からビン哺乳を始めとする母親の育児手技獲得に向けての指導を開始した。退院前検査異常なく、1泊の退院前母児同室を経て生後55日目で自宅退院となる。

家族構成：7人家族（本人、夫、子ども、母の両親、祖母、患児）

Ⅳ. 結 果

面接で得たデータを基に、転院から1週間以内の時期では、転院前の思いとして「出産前も転院について説明があったので特に困らなかった」「NCUの環境になじむのもまた一からになるので来る日の午前中までそわそわしていた」などがあげられた。A病院NCUの印象として「A病院NCUの雰囲気は明るく開放的だった。機械や保育器も少なくとても面会にきやすかった」と思っていた。転院と児の成長を結びつけ安心感を抱いているでは「転院したことは、退院に一步近づけたと思った」「病的には身体が落ち着いているということ言われ安心」などがあげられた。児に何をしてもよいかかわらないでは「赤ちゃんに何がしたいのか聞きたい」「赤ちゃんにこういうことがしたいというのはまだない」「生まれてから1か月間抱っこできず保育器の壁がもどかしかった」などがあげられた。（表1）

表1 転院から1週間以内

| ラベル | 語られた内容 |
|-----------------------|---|
| 転院前の思い | 出産前も転院について説明があったので特に困らなかった |
| | なんで転院するんだろうとは思わなかった |
| | NCUの環境になじむのもまた一からになるので来る日の午前中までそわそわしていた |
| A病院NCUの印象 | A病院NCUの雰囲気は明るく開放的だった。機械や保育器も少なくとても面会にきやすかった |
| | ケアが手薄になるとは思わなかった |
| 転院と児の成長を結びつけ安心感を抱いている | 転院したことは、退院に一步近づけたと思った |
| | つれて帰る時期がみえてきたのかなと思った |
| | 病的には身体が落ち着いているということ言われ安心 |
| | うちの母は直接先生にA病院に転院することは元気になって安定しているということだと聞いていた |
| 児に何をしてもよいかかわらない | 赤ちゃんに何がしたいのか聞きたい |
| | 赤ちゃんにこういうことがしたいというのはまだない |
| | 抱っこしたくても、今抱っこしていいのかわからないので聞きたい |
| | いくらでも抱っこしたい |
| | 抱っこできてすごくうれしい |
| | 生まれてから1か月間抱っこできず保育器の壁がもどかしかった |

直接授乳開始時期では、転院前に抱いた、A病院での入院生活のイメージとして「転院後、すぐに退院へ向けての準備が始まるとはイメージしていなかった」があげられた。児に対する先の見えない不安として「B病院ではあまり赤ちゃんに触ることができなかつたので、赤ちゃんがこの先どうなっていくのかあまりみえなかつた」があげられた。退院の

準備が進んでうれしいとして「退院の準備が進んでいくことはうれしかった」「育児練習の今後の予定を教えてもらったので面会を楽しみに来ることができた」などがあげられた。児に対して今できることを知りたいでは「普通だったら育児本を参考にできるが、早く生まれているので今の児に何ができのかがわからない」があげられた。(表2)

表2 直接授乳開始時期

| ラベル | 語られた内容 |
|------------------------|--|
| 転院前に抱いた、A病院での入院生活のイメージ | 転院後も、B病院と同じような入院生活だと思っていた |
| | 転院後、すぐに退院へ向けての準備が始まるとはイメージしていなかった |
| 児に対する先の見えない不安 | B病院での面会は児に会えてうれしかったが退院がみえなかつたので不安だった |
| | B病院ではあまり赤ちゃんに触ることができなかつたので、赤ちゃんがこの先どうなっていくのかあまりみえなかつた |
| 退院の準備が進んでうれしい | 退院の準備が進んでいくことはうれしかった |
| | 転院してきて急激に退院がみえてきてうれしい |
| | 育児練習の今後の予定を教えてもらったので面会を楽しみに来ることができた |
| | 胃管がとれてしばらくは哺乳ビンだけの哺乳かと思っていたがすぐに直接授乳することができてうれしかった |
| 児に対して今できることを知りたい | 小さく生まれたし母乳を直接あげられないことはわかっていたのではないかと割り切って時期がくるまで待とうと思った |
| | 普通だったら育児本を参考にできるが、早く生まれているので今の児に何ができのかがわからない |
| | 児に対して、今できることを教えてもらいたい |

退院の目途がついた時期では、退院できることへの喜びとして「入院期間が長かつたので退院の話聞いたときはうれしかった」「急に退院が決まがつたので戸惑いはなかつた」などがあげられた。児に対して抱えている不安として、「いろいろ考えて、悲しいわけじゃないけど涙がでてくることもある」があげられた。家族の支えとし

て、「夫が積極的に育児に関わってくれる」「家族みんながサポートしてくれる」などがあげられた。NCUスタッフとのかかわりとして「スタッフが細かく児の様子を教えてくれたので退院に向けてさらにかわいがることができた」「ここで聞いてもらつて話せた」「今回の妊娠や出産を振り返つて話す機会があつて助かつた」などがあげられた。(表3)

表3 退院の目途がついた時期

| ラベル | 語られた内容 |
|--------------|---|
| 退院できることへの喜び | 退院前母児同室をして、児に対してイライラするかと思つたが全然感じなかつた |
| | やつと退院までこれたと感じた |
| | 入院期間が長かつたので退院の話聞いたときはうれしかった |
| | 急に退院が決まがつたので戸惑いはなかつた |
| | 無事に大きくなつてくれてよかつた |
| 児に対して抱えている不安 | A病院にいるときは不安で泣くことが多かつた |
| | 転院して児にしてあげられることが増え、泣く回数は減つたし、面会にくるのが楽しかつた |
| | いろいろ考えて、悲しいわけじゃないけど涙がでてくることもある |

| ラベル | 語られた内容 |
|---------------|---|
| 家族の支え | 児が小さく生まれたので、主人が怖くて触れないと思ったが、私より先に触っていたのでありがたいと思った |
| | 夫が積極的に育児に関わってくれる |
| | みんなで児の退院を楽しみに待っていてくれる |
| | 家族みんながサポートしてくれる |
| NCUスタッフとのかかわり | スタッフが細かく児の様子を教えてくれたので退院に向けてさらにかわいがることができた |
| | 友達には頻繁に会えないししゃべれない |
| | 両親にも話せないこともある |
| | ここで聞いてもらって話せた |
| | 今回の妊娠や出産を振り返って話す機会があって助かった |

V. 考 察

転院により環境が変わることは母親にとってストレスと感ずることではないかと考えられたが、今回の症例では転院は特に大きなストレスとはならず、受け入れが良好であった。

1回目のインタビューでは、「出産前も転院について説明があったので特に困らなかつた」「転院したことは、退院に一步近づけたと思った」「NCUの雰囲気は明るく開放的だった。とても面会にきやすいと思った」などと転院を肯定的に捉えることができていた。しかし、その一方で「来る日の午前中までそわそわしていた」と、通い慣れたB病院での面会や母親の生活パターンが変わることへの不安が聞かれた。児との関わりについては、「赤ちゃんにこういうことがしたいというのはまだない」「生まれてから1か月間抱っこできず保育器の壁がもどかしかつた」と、小さく生まれた児と長期間ふれ合えなかつたことへの複雑な心境があることが考えられた。

2回目のインタビューでは、「転院後、すぐに退院へ向けての準備がはじまるとはイメージしていなかつた」と自分が抱いていた転院後のイメージとの違いに驚いていた。しかし、「退院の準備が進んでいくことはうれしかつた」と育児練習が退院へつながっていくことを実感できていた。児との関わりについて1回目のインタビューでは「赤ちゃんにこういうことをしたいというのはまだない」という気持ち

ちだつたのが、育児練習を積み重ねていくなかで2回目のインタビューでは「児に対して今できることを教えてもらいたい」という気持ちに変化していた。荒木ら¹⁾は、「親は「面会者」ではなく、子どもを育てるチームの最も主体となる一員であり、親がそのことを実感できるよう関わりが求められる」と述べている。このことから面会時のスタッフの関わりや声かけ、現時点で可能な育児練習の提案が重要であることが考えられた。

3回目のインタビューでは、「入院期間が長かつたので退院の話聞いたときはうれしかつた」と退院できることへの喜びを感じていた。一方で「悲しいわけじゃないけど涙がでてくることがある」と児に対して抱えている不安もあり複雑な心理の表出が聞かれたが、「夫が積極的に育児に関わってくれる」「家族みんながサポートしてくれる」と母親の精神面を支えるために家族のサポートが重要であった。「今回の妊娠や出産を振り返って話す機会があつて助かつた」「ここで聞いてもらって話せた」など、インタビューを通じたスタッフとの関わりが母親の気持ちを整理する上で重要であり、不安や児への想いの表出に必要なことと考えられる。

これまでは母親の気持ちをじっくり聞く機会がなくスタッフ主導の育児練習であつたように感じる。藤野ら²⁾は、「NICUに入院している子どもの母親の思いを知り、母親のニーズにあつた支援を行うことが必要である」と述べている。このことから、今後は転院から退院までの長期的な見通しを母

親に伝え、日々細やかな関わりを持ち育児練習を計画的にすすめられるように援助していく必要があると考えられる。

VI. 結 論

1. 今回の症例では事前に転院について説明がされていたため、転院に伴った生活パターンの変化に対する不安はあったが、転院自体のストレスはなかった。
2. 早期から児への関わりを積極的にもち、育児練習をするうえで医療者側から今何が出来るのかを提示することは母親のニーズに合った支援につながる。
3. インタビューをすることで信頼関係を築くことができ、母親が自宅退院までの経過をふり返り、児への思いを表出した上で、母親の思いに沿ったケアが出来る。

(本論文の要旨は平成29年10月23日 第53回日本赤十字社医学会総会で発表した)

文 献

- 1) 荒木淳子 岡園代：親役割獲得への不安
NEONATALCARE 2010 Vol.23 P37
- 2) 藤野百合 中山美由紀：新生児治療室（NICU）に入院した子どもをもつ母親の思いに関するメタ統合 大阪府立大学看護学部紀要 17巻1号 P66 2011
- 3) 鈴木麻友ら：NICUに入院経験のある子どもをもつ母親の育児不安. 日本新生児看護学会誌 Vol.22. No.1. 2016